

「裁かなくともよそ」

箴言27:5-6

ルカ6:37-45

(1)

今朝は、特に、6章37節から38節の箇所と、41節から42節との箇所に目を留めます。

「わたしはつけませぬ」とあります。こつした箇所が、説教で取り上げられてきた回数は計り知れません。もう、聞き飽きた、いえ、「もう分った・分った」といいたいところでもあります。しかし、繰り返して念がおなれていきます。

「わたしはつけませぬ」と言われるのです。まずまず耳元でこの御言が響いてきます。他をさばきやすい面があります。その度に幾度となくフーキを踏み、その度に「主よ。主よ。」と天を仰ぎながら悔い改めることを促されてきたか計り知れません。

わたしの母親は、人の悪口を言い始めますと、「人をのさば穴に」とわたしをなでました。

「なば」とは、英語の「judgment」です。人を「判定する」・「分析する」・「品定めする」・「こつした」などを、朝起きてから寝るまで、四六時中、思いや心の内で絶えずこつきます。

「人をなばへ」こつきを、多くは反射的・本能的にしています。フーキが効きませぬ。

しかも、人をさばへくとは、快感が伴いますから始末に負えません。

それでは、「なばへな」との御言は、無理な要求なのでしょいか。

「わたしはつけませぬ」とは、わたしたちが、公正な「なばき」を求めることまで禁止されているわけではありません。この誤りは見過ごせぬ「不義・不正をこのまはしはできぬ」ところ思いが誰でもあります。確かに、正義がすたれば、この世は闇であります。

世を正すことは、確かに大切なことです。しかし、相手を正すあまりに、自分自身を正すことを忘れがちです。まず、自分を敵うく点検する必要があります。

鏡に映る自分の姿は、厳密には、左右がアベコベといえます。他人の目に、自分は正しく見られています。しかし、自分の正しい姿を自分が見ているわけではありません。

6章41節と42節において、主イエスはこう申しました。

「あなたは、兄弟の目にあるちりが見えながら、どうして自分の目にある梁には気がつかないのですか。自分の目にある梁が見えずに、どうして兄弟に『兄弟。あなたの目にあるちりを取らせてください』と言えませうか。偽善者たち。まず自分の目から梁（はり）を取りのけなさい。そうしてこそ、兄弟の目のちりがはっきり見えて、

取りのけるじうがひきぬす。」。

兄弟の目にあるのは「チリ」―共同訳は「おが膺（へす）」と訳しました。自分の目にあるのは「梁」―、共同訳は「丸太」と訳しました。

わたしたちは、「自分の「お」」に気が付きませぬ。ところが、他人の「お」には、きわめて敏感です。他人の部屋に入って異様な匂いを感じる人でも、自分の部屋の匂いは気になりませぬ。

多くの人は、主イエスから、あなたの目にあるのは、「梁」と指摘されます。「エエ……」と怪訝な顔をするかもしれませぬ。他人の目には「チリ」、自分の目には「梁」「丸太」であること、「誰も気づいてませぬ。」

何が悲しいと言いつて、他の人を容赦なくはやく、愛のなごきびこ言葉を聞く時は、悲しく・淋しく・はあせませぬ。

欠点だけを持ち合わせている人など、この世に存在しているはずがありません。

人をさばきやすいのは、多くの場合、自分の存在が正しく評価されていないという不満、自分の尊厳が軽視されていると思われる不満があります。それで何かと自分が評価されたいと思うあまり、厳しく相手をのばしているじうに気づきます。

確かに、あれこれと「人をさばく」・「品定めをする」ことは不満の解消になるかも知れませぬ。ネエ・ネエ、ネエなどと井戸

端会議を始めている内、話しが弾んで、トクノコメント一気取りで、容赦なく批判すれば、相手に対する思いやりなどなくなるります。しかも、相手に対する批判・批評がピタリと合っていないば、これほど快感を覚えるものはありません。

それでは、「お」ばいばい「お」に対して、聖書は何と言っているでしょうか。万が一、相手の中に梁でも丸太でも見つけ出したとしたら、「お」ばい「前」、一人黙して祈れと勧められています。祈った上で、どっしても言いたければ、恐れずに直接その人に向かつて注意しなさいと言われています。「あからさまに戒めるのは、ひそかに愛するのにまじりぬ。愛する者が傷つけるのは、まじりぬ。お、お、あだの口つけをぬのは偽りかじである」「(箴言27:5-6)とあります。

(2)
15世紀、シパングといわれていた極東の日本に宣教にきたイエズス会の神父たちは、「アモール(ラテン語)の翻訳に苦労したといひます。あれこれ熟慮し検討した結果、「お大切にする」という日本語に落ち着いたといひます。「愛する」とは、具体的にいへば「相手を大切にすることにある」との結論に達したのであります。

相手を大切に思う思いがあれば、相手をシロシロと眺めたり、相手を観察する眼差しと出会うことはありませぬ。たかが「眼差

「、」を「」眼差し」です。目線だけはこまかしがきかなのです。

たとえば、父親と母親とでは、どちらかと言えはの話ですが、わが子を見つめるまなびが違ひようと思われまふ。

母親のまなびには、目を細めながらわが子を見つめている眼差しが見られます。しかし、父親は、どちらかといえば、あの神社の門前で両目を大きく開いてシロシロと観察する仁王さまのようなたころがありません。そのせいか、日本の父親とわが子とはいつまでもギョウシヤクした雰囲気があります。ところが母親は、右目でわが子のために執り成し、祈りながら、左目では、わが子の弱さ・欠点を忍耐しながら、慈しむ眼差しがあるように思われます。

世間では、「自分のことは自分が一番分っている」といいますが、果たしてそうでしょうか。一番分っていないのは、自分自身ではないでしょうか。「灯台もと暗し」なのです。自分のへんが見えている人はいます。

ギリシヤの哲学者「キケロ」は、人間の顔の不思議な成り立ちに関心を持ちました。口は一つ、目と耳とは二つ、その意味をよく考えようというのです。目と耳とは、外側にアンテナを張っています。なかでも、自分の目をえぐり出して、自分自身の内を見つめる「内省の目」を持ち合わせてはいけません。煙する「二つの目」でしっかりと外

だけを見つめます。

さらに、耳も外向きです。しかも、人間の耳は中音しか聴きとれません。極度に高い音も、極度に低い音も聞き取る能力がありません。

なかに口はひとつですが、口二つ、いえ、三つもあるのではないかと思わせる人がいます。自分の口を「フロントロール」出来る人はいません。

「もし、言葉の上であやまちのない人があれば、そういう人は、全身をも制御することのできる完全な人である。

舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか。舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の火で焼かれる。舌を制しうる人は、ひとりもいない。それは、制しにくい悪であって、死の毒に満ちている。わたしたちは、この舌で父なる主をさんびし、また、その同じ舌で、神にかたどって造られた人間をのろっている。同じ口から、さんびとろいどが出て来る。わたしの兄弟たちよ。このような事は、あるべきでない」。目も口も耳も、何ともなかなか厄介な存在なのです。

(3)

主イエスは、6章39節と40節において

「盲人にたごえています。」盲人に盲人の手引きができませんでしょうか。「盲人」とは他でもなく、このわたしを指している言葉です。自分のリアルな実像が見えていないとすれば「盲人」なのです。

「おお、すべて他人をさばく人よ。他人をなほさく人によつて、自分を罪に定めたいのです。さばくあなたも、同じことを行つておられます。」(ロマ2:1)。

「もしある人が、事実そうでないのに、自分が何か偉い者でもあるかのように思っているとすれば、その人は自分を欺いています。一人一人自分の行いを検討してみなさい。そして、自分だけに誇るべきではありません。ほかの人には誇るべきではありません。」(ガリテヤ3:10)。

自分を度外視して、自惚れの世界に満足してはならないのです。主イエスは、何とつても、自惚れという眼鏡を取り外そうとつておられます。

ドイツの牧師「ブルームハルト」は、ありとあらゆる人と、深い交わりをしたといえます。様々な人と交わりをしていくうちに「自惚れ」の御言は、何時しかわたしの血となり肉となったとこの御言です。

それは「なほさく」との勧めは、いつしか「なほさく」ではなく「さばく」という禁止命令でも、強制されてくる勧めではないことが分ったとこの御言です。「さばく」とは「さばく」はかななくて「さく」、神からの大いな

る許可であることに気付いた」と申すことができます。

わたしたちが「なほさく」ではなく「さばく」と正しく、正確に、しかも、相手の実情に応じてなほさくの方がおられるのではないかと、使徒信条において、「かこひり来たりて、生けるものと死ぬるものとを審きたまはる」と告白してきただけではありませんか——

「正統」と「異端」「女を敬ふ」と「毒妻」「正しくなく悪」「白と黒」とを区別しないこと、とただけ多くの誤りを犯してきたでしょうか。地上の法廷が不満であれば、「天上における審判」「天上にある法廷」があるではありませんか。

その確信するなむ、さばく、さばかな人も「さく」、「さく」、「必要がなく」、「さく」にならないことでしょうか。

主が、正しくなほかれる神の時が来る、「その時に先立つてはきをすまぬ」(①)「コリント4:5」と、わたしたちに注意が差し向けられています。「さばく、さばく、さばく、さばく」とは、人をなほさくする懸念ではならぬこと、人をなほさくする仕事は、主におゆだねして、隣り人を愛する心に心を向けねばなりません。

何よりも、わたしの目にさく「愛」「光」「存在に気づかぬはなりません」。

親からダメ、教師からダメ、仲間からダメと評価されていたお子さんが、次第に才能を発揮して、隠れていた才能が開花

した話を耳にしました。他人の見目目ぼひ
此にたらならぬものはありませせと。

とすれば、養育する立場の者、指導する
立場の者などは、まず、自分の目から「梁」
を取り除かれねばなりません。自分の目に
「梁」があると気付いていない者が、どう
して人を正しく導いたり、指導したりでき
るでしょうか。指導も養育も必ず立場の者好、
自分を正しく見しめ直さねばなりませんと。
自分の目には梁があると気付いた者は、「お
お主女」と申しあげて、十字架のキリスト
の御前に膝まつき、自分の罪を悔い改めね
ばなりません。

「神の憐れみが、あなたがたを悔い改めて
導くことも知らなごで、その豊かな慈愛と
寛容と忍耐とを軽んじておるのですか」(マ
2：4)。

まず、自分自身を正しく見つめなおさね
ばなりません。「梁」と見なすものは「自己」、
自分が「自己」に過ぎないと見なしている
ものは、「梁」とあるとしなくてはなりません。
と。

キリストの十字架の縦は神のまはきを示
しており、左右にともでも伸びているか
のほうに思われる横の棒は、無限のゆるみ
表わしていると見られてきました。縦と横
とが交差しているところ、そこに神の義と
愛とが会えるところとみなされてきました。

小言幸兵衛(口やかましい人の意味)に
なりがちなわたしは「まず、自分の目

から「——、自分の襟を正して、神の御
前に立たなくてはなりませんと。

6章43節と44節と45節には、悔い改
めた者は、良い木となり、真の豊かな実り
が結ばれると記わしておられます。

「悪い実を結ぶ良い木はない、良い実を
結ぶ悪い木もあります。木はたれでも、
その実によつて分るものとす。さばりから
さかすかは取れず、野ばりからさばりを集
めぬものとばせせと」(マ14：17)。
主イエスは、何としても良い実を結ぶ良
木にあらんと問うかけておられます。

【祈り】

天の父よ、今朝は他をさばきおすいわたし
たちに対する警告の御言に目をとめました。
「さばりな」「ばりな」「さばりな」と
なれておる、むしろ、わたしたちとては
愛するところに心を向けねばなりません。ど
うかそうした御霊のお力を与えてください。
主イエス・キリストの名に祈ります。
アーメン